

書かれた「この地」を読む

📖 みのかもブックマーク

この地を訪れた名高い文人・画人がここで見聞きした物事、感じた思いを書き綴った文章に出会うことがあります。旅行、記事や小説の取材など来訪の目的はそれぞれ、しかも多くは本の中の数ページです。しかし読み深めてみると、「この地」がその人にとって何かしらの記憶に残る土地、大切な場所(ブックマーク)になったから、著者は書き記すことに決めたのだということが共通して見えてきます。

この連載では、描かれた風景とともに著者の人となりや歴史的な背景を探りつつ、なぜ「この地」を書いたのか、そのいきさつを紹介していきます。



▲美濃加茂市街地を鳩吹山(可児市)より望む

江戸時代の紀行文から①

庶民にとって旅が身近な存在となった江戸時代、見聞した旅先の紀行文が多く書かれるようになりました。中でも自然美あふれる木曾路や中山道をたどるルートは魅力的だったようです。この地が書かれた最初の紀行文は、文人・貝原益軒が著した『岐蘇路記』(『木曾路之記』)です。1685(貞享2)年に江戸から京までを歩いたもので、このあたりの様子を次のように記しました。

「…太田の宿、家数二百五十軒程有、太田の宿の上まで船着く、木曾より出る薪まきなどをつみて下す。…太田より名古屋へ九里有り〇太田より一里北に蜂屋という所有り。此辺このの村々より柿を持て蜂屋へ出るを、けづりてつり柿とす。美濃のつるし柿は此辺より出る蜂屋柿と云、…」

太田や木曾川の様子とともに、名産・蜂屋柿についても触れています。この『岐蘇路記』は文字の情報だけでしたが、この発刊の後、秋里籬島あきさとりのしりまが書いた『木曾路名所図会』など、絵入りのものが主流となっていくます。



▲『岐蘇路記』 貝原益軒 著

貝原益軒(1630-1714)

江戸時代の本草学者、儒学者、教育者。筑前国出身。福岡藩士として京都で学び、木下順庵きのしたじゆんあんや山崎闇齋やまざきあんさいらと交友を深め、生涯、膨大な著作を残した。

📍みのかも文化の森 ☎28-1110